授業名　　学籍番号
日付

大学院のゼミにおける、非言語表現—「手振り」と「首振り」に着目

日付　S09（アルファベット・カナ表記）

1. はじめに

談話分析の中で、一つの分野は非言語表現である。つまり、談話のときには、非言語の表現が、言葉を使わずに、あるいは発話に伴って使われた。ヴァージニア・P. リッチモンド等（2006）によると非言語メッセージは、「外見的特徴、ジェスチャと動作、表情と視線行動、音声行動、空間、接触（p. 12）」六つに分類できる。

この論文は非言語表現のジェスチャと動作中の手振り[1]と首振り[2]に着目し、大学院のゼミの談話の中で、説明するときに、どのような非言語表現を使うのかを明らかにすることである。

留学生教育にとって、大学院のゼミの談話を分析することに通して、留学生たちがゼミなどの多人数の談話での方法を身につける、というメリットがある。特に多人数の相手に説明するときに、内容を聞き手にわかりやすいために、非言語表現がどんな役割を果たすのか、そしてそのため、どんな表現が選ばれるか。この問題が答えられれば、日本語学習者は多人数の談話での自然な非言語表現を知るため、ゼミだけではなく、たいてい会議でもより参加しやすくなるであろう。

2. 先行研究と本研究の位置づけ

大学院のゼミの談話における非言語表現について扱った研究には、ザトラウスキ（2002，2010）、西尾（1997）、山田(1992)などがある。

まず、ザトラウスキポリー（2002）は、日本人とアメリカ人を被験者をし、セリフがないアニメーションを見させるから、母語と非母語の言語（日本語と英語）でそのアニメーションの内容を語ってもらい、その結果を分析した。

次に、ザトラウスキポリー（2010）は、授業を対象に講義者はどのような時に身振りを用いるのかという問題について、身振りを七種類に分かれ、講義者の台詞と身振りを文字で併せて記録することで、分析するという内容であった。

そして、西尾新（1997）は、研究の背景として、身振りの①情報を反映する、②発話に詰まった状態にも語彙アクセスを容易にしているという性質を紹介し、そして、表記規則を知らせし、最後に、その表記を用いてからの発見と表記法の問題を挙げた。

また、山田(1992)は 10 人の日本人と２人の留学生の談話を録画し、話者が撮影機を気づかないようになった 10～20 分間から、首振りの頻度、国による相違、文の中の首振りが現れる位置などを明らかにした。

---

[1]McNeill（1992；ザトラウスキー(2010)からの孫引き）は「身振り」を、発話に伴い、意味をともに作り上げる手、腕などの動作と定義すが、本稿は広い意味の「身振り」より「手振り」が適していると考えている。

[2] 首振りは、山田(1992)に従い、頭部の縦振り動作とそれに準ずる上半身の動きと定義する。

しかし、大学院のゼミの談話を対象に、説明の仕方という観点から扱った研究はない。そこで、私は多人数の談話に用いている非言語表現で分析を行うことにしたい。

この分析で、非言語行動がどのように内容の伝達に支えるかと明らかになり、手振りと首振りが多人数の談話でどんな役割があるかということが解明し、日本語教育に良いと考えている。

3. 研究の資料と分析の方法

研究の資料は、2015 年 9 月に、神奈川県の三浦半島のホテルで行われた都内の大学院の某ゼミマールの二つの 40 分程度の談話である。

一つは、絵本を日本語の読解クラスのテキストにするという内容が発表したあと、発表者と質問者ＡＢと先生の討論のビデオであった。

もう一つは、日本語学習者が日本語の論文を書くときに悩むことをアンケートしたあと、各々の因子について討論するというビデオであった。

本稿は一人の発表と、皆の談話に着目するので、前者の 22 分まで発表者の発表と質問者 A の発言、後者の 17 分から 18 分 40 秒先生と発表者の発言を取り出す。

そして、そのビデオ資料から非言語表現観点からデータを抽出し、多人数の談話の時の説明の仕方によって分析を行った。分析の表記法について、手振りは西尾（1997）の方法を、首振りは山田(1992)に参考し、記録する。非言語行動の機能はヴァージニア・P. リッチモンド等（2006）による「補完、矛盾、強調、反復、調節、置換（p. 11）[3]」を基づいて分析を行う。もし調査を行うあと、分類の枠に含まれない表現があれば、後文に討論する。

4. 分析の結果

１）身振りのタイプと、その機能：

身振りのタイプについて、ヴァージニア・P. リッチモンド等（2006）はエンブレム（表象動作）、例示的動作、調整的動作、情動表出、適応的動作と言っていた。

a) 表象動作：言語を直接に換言し、言い出さなくても意味がわかる、特定の意味を与え、よく集団・文化によって意味が変わる動作。

例①

先生：コメントいただければと思いますので、<u>よろしくお願いします</u>。（頷く）

発表者 B：<u>よろしくお願いします。</u>＜補完＞

b) 例示的動作：発話している内容の説明を支援する動作。

---

[3] 六つの機能の分類を要約すると

1) 補完：非言語メッセージは言葉の内容と一致し、言葉の意味を明確化し、詳しくする。
2) 矛盾：非言語メッセージは言葉の内容と違い、皮肉などの場合で使われ、言葉以外、本当の気持ちを伝える。
3) 強調：非言語メッセージは言っている言葉の重要性を強調する。
4) 反復調節：非言語メッセージで、言語の相互作用を調節したり、管理したりする。
5) 置換：非言語メッセージは言葉の代わりに意味を表す。

例②
インタビューの結果はSCAT［スキャット］というSteps for Coding and Theorizationという手法で分析を試みてるんですが

point paper[erect（2）]　＜補完＞

例③
これ、今ちょっと途中右側ができてないんですけど、

point paper, C&G round［erect（2)]

全部が今こんな状態になってしまってて、重要な語句は、出せるんですけど、言い換えみたいなものがちょっとうまくできてない、という段階で、ちょっと今止まっています。

point paper［erect（2)］＜補完＞

例④
あ、先程の（発表者Ａ：はい）絵本リストですね。

pass/OW＜補完＞

例⑤
それで、上位400語が論文に掲載されてたので見てみたら
bound<2>＜強調＞
例⑥
次は、酒井（2002, 2005）というのと、古川・河手（2003）というのは
jump＜強調＞
英語多読の実践報告なんですけども
r-wipe

c）調整的動作：ターンの移転や対話の維持という働きの動作。

この分析を通して、身振りではこのタイプのが、あまりないと分かった。首振りならある。
例⑦
質問者A：子供向けであるものが絵本なのか。
発表者：うーん、ではないですね。＜反復調節＞

２）手の身振りが行われる位置

西谷（1997）による、身振りがよく行われる位置は上半身で体軀の前面の空間であり、

それを上下左右それぞれ三分割し、９つに区切った。上から下は（UP：MD：LW）で、左から右は（LS：CE：RS）である。ゼミの中の手の身振りは、ほとんどMD-CEという、胸の前に行われる。

３）首振りを使うときの表現

ゼミの中で発言者が言いながら頷くとき、使う表現を数えたら、首振りのよく使うタイミングが明らかになった。

	数（頷く二回の数）	
～は・が	３	
だ	１	
～けども	４（１）	
否定形・マイナスの意味	４（２）	問題があった、なくなっていく、割と、
～という・というと	３	
～て	３	
～ので	３（１）	
～と思う・と思っている	２	
～も	１	
名詞	４（２）	
疑問表現	４（１）	
～ね	３（１）	
言い間違った	１	
その他	２（２）	～ように、～ている

①強調する
②否定や自分の意見を表すとき、柔らかくする
③相手の人の賛成を求める
④言い直す

さらに、視線が合って頷きと、合わずに自分で頷きと、二つの種類がある。使い分けが分析しなかったのが、視線が合って、頷きの場合、相手の人は殆どすぐに返事する。つまり、談話調節（相手の人は分かっているかどうか確認する・自分がまだ話し終わっていないこ

とを表す）の機能が果たしている。

例：　先に伺わいたかったんですけども（発表者Ａ：はい）

英語教師の中でも（発表者Ａ：はい）

5.　**実行の問題点**

記録する方法は見つかりましたが、大量のデータに対してどのような切り口でいいのか今も考えている。

参考文献

- 西尾新（1997）「発話に伴う身振りの表記法作成の試み」『京都大学教育学部紀要』43 pp. 149－160
- 西尾新（2006）『発話にともなう身振りの機能』風間書房
- ザトラウスキポリー（2002）「日米におけるアニメーションのストーリー語り方と非言語行動の相違」水谷修　李徳奉編『総合的日本語教育を求めて』国書刊行会　pp. 187－201
- ザトラウスキポリー（2010）「講義の談話の非言語行動」佐久間まゆみ『講義の談話の表現と理解』くろしお出版　pp. 287－204
- 山田美樹(1992)「談話における非言語行動の一側面 ： 首振り動作・視線と談話との関係について」『阪大日本語研究』 4, pp. 33-58
- ヴァージニア・P. リッチモンド , ジェイムズ・C. マクロスキー（2006）『非言語行動の心理学―対人関係とコミュニケーション理解のために』北大路書房